

都道府県別賞一等

家族の笑顔を守るために

静岡県 島田市立六合中学校 二学年

川村 奈央

それは突然の出来事だった。今年の一月、学校から帰ると祖母から

「お姉ちゃんが学校で倒れて、救急車で病院に運ばれたって。」

と言われた。容体は落ち着いていると伝えられたものの、あまりに急なことで状況が飲み込めず、ただ不安でたまらなかった。両親が帰ってきて、姉は脳の病気であること、倒れたのは脳出血が原因だと聞いた。私は、姉はどうなってしまうのかという心配と、姉の異変に気づいてあげられなかった後悔でいっぱいだった。その数日後に手術が行われ、無事に成功し、姉は一カ月程で退院することができた。

それから、少しずつ今までの生活を取り戻し、家族みんな安心して過ごせていた。

しかし、この夏休みに姉はてんかんの大きな発作を起こし、また救急車で運ばれてしまった。今回は病院で点滴を打ってもらい、家に帰ってこられたので私はとても安心したが、母はいろいろと悩んでいるようだった。それは、てんかんを持っている姉がいつ発作を起こすのかという心配と、これからの生活で制限されてくることについてだった。中でも母が、姉はてんかんによって、普通の保険には入れないかもしれないと言っていたことが私の中で引っかかっていた。そのとき、生命保険とはどんなものだろう、どうして姉はみんなと同じ保険に入れないのだろうと疑問に思い、調べてみることにした。

まず保険とは、入院したり手術をしたりしたときに、給付金をもらうことで費用をおさえられるという、もしもに備えるために大切なものだともわかった。姉が初めに倒れて入院したときは「学資準備のための保険」の医療保障で、入院費などを負担してもらったそうだった。しかし、この保険の満期は十八歳。これから姉が大人になって生命保険に入るには、高い保険料や様々な条件などがあり、普通の生命保険には入れないと知った。

私は姉がてんかんという持病とリスクを抱えてしまったことで、普通の人と同じような保険の選択肢が減ってしまうのはかわいそうだと思った。そこで持病がある人の保険について調べると、今は昔よりも入れる保険が増えていることがわかった。保険はもしものことがあったとき自分と自分の家族を支えたり、遺されてしまった家族を守ってくれる存在だ。だから、今までいろいろな困難を乗り越えて姉が、これからの生活を安心して送れるような保険が少しでも増

第59回中学生作文コンクール

えるといいなと思う。

自分や家族が元気なうちに、もしものことを想定したり、死んでしまった後のことを考えるのは正直難しいし、抵抗もあった。しかし、姉の病気をきっかけに保険というものを知り身近に考え、その大切さへの理解を深めることができた。私はまだ中学生だけれど、大人になったときに自分や家族を守る保険について、真剣に考えていきたい。

そして何よりも、姉や家族ともしもの保険を使うことなく、健康に過ごせることを心から願っている。